The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コリャードが用いる子音字 ‘v’ のない ‘o’ ‘ŏ’ は何をあらわすか : キリシタンのローマ字表記に対する解釈をめぐって
Author(s)	山田, 昇平
Citation	語文. 2018, 111, p. 69-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コリャードが用いる子音字 ‘v’ のない ‘o’ ‘ŏ’ は何をあらわすか

――キリシタンのローマ字表記に対する解釈をめぐって――

山　田　昇　平

1　問題設定

いわゆるキリシタン文献には、中世末頃の日本語をローマ字で表記したものがあることが知られる。そのうち、イエズス会の出版物では、当時の日本語の「オ」（「ヲ」）に、子音字を伴った ‘vo’（‘uo’）をあてる。この表記は、研究史上、当時の「オ」の音価を［u̯o］と推定する論拠として扱われることが多い。これに対して、ドミニコ会宣教師D. コリャード（近世初期来日）がローマで出版した「三部作」（『日本文典』『羅西日辞書』『さんげろく』）では、「オ」について基本的に同様の表記（‘vo’（‘uo’））を採用するものの、次のような子音字を用いない ‘o’ 表記も用いる。

（1）mǒnen o 妄念を　　『さんげろく』 p. 38 l. 15

この ‘o’ 表記は、撥音をあらわす ‘n’ に後続する場合にあらわれる（後述）ことから、いわゆる連声との関係が指摘される。一方で、これを音声的に捉え、子音を伴わない単独母音［o］への変化を写したと解釈する論もある。

また、三部作には、子音字を用いない ‘ŏ’ も存在し、これもまた当時の言語事象との関連が指摘される。

（2）iùqi ŏte 行き合うて　　『さんげろく』 p. 34 l. 16

これらはイエズス会ローマ字文献にはあらわれず、コリャード独自の特徴といえ、その著作を理解する上で注目されよう。本稿の目的は、これらの子音字を用いない ‘o’ ‘ŏ’ 表記を対象とし、これらが何をあらわすかに、解釈を下すことにある。(1)

2　先行研究

まず、先行研究を確認する。先行研究では主に ‘o’ 表記が議論の中心となり、これを連声との関連から述べるものと、直接的な音声の反映とみなすものがある。

2.1　‘o’ は連声に関わる

‘o’ 表記に触れたものに、大塚光信（1966：33-34）がある。同論は、コリャード『羅西日辞書』を扱ったものであるが、三部作の特徴として次のように述べる。

（3）連声といえば、Colladoの三書以外には他の例のない、撥音nのつぎに位置するvoをoと表記する方法もこれと関連する。文典で「nの後にuoがくる時にはuが失われる」（訳書 p. 98）と説明し、懺悔録中でも･･･goiqen o tanomi marasuru.（p. 18 その他）とある。（以下略）

ここでは、「連声といえば」とあるように[(2)]、この表記をいわゆる連声と関係付ける。その根拠は、‘o’ 表記が撥音 ‘n’ に続く場合にあらわれるといった分布、及びコリャード『日本文典』の次の記述である（訳は大塚高信訳版による）。

（4）Quando post, n, sequitur, uo, amittitur, u, v. g. go uono uqe tatema tçutta, benefitia accepi.（p. 63 ll. 24-25）

【n の後に uo（を）がくる時には u が失われる。例. go uono uqe tatema tçutta（御恩を受け奉つた）p. 98 ll. 9-10】

このように大塚（1966）は、‘o’ 表記について、特に撥音 ‘n’ に連続することから、連声と関連付ける。ただし、「関連する」とするに留めるなど、より具体的な解釈を明示しない。ここでは、あくまで表記の特徴の指摘に留めているようにみえる。

2.2 ‘o’ は［o］をあらわす

これに対し、岩澤克（2013：72）では『さんげろく』を対象に次のように述べる。

（5）助詞「ヲ」に対してuoやvoではなく、oのみで示す表記が見られる。これは撥音に後続する場合にのみ現れ、全体を通して一五例見られることから単に誤字と捉えるのは不自然であり、近世に生じたとされる /o/ の［uo］から［o］への変化を示す用例である可能性が窺われる。

ここでは、子音字を用いない単独の ‘o’ 表記に対して、［o］の音声の反映である可能性を指摘する。また、同様の立場をとる岩澤（2017：287）では、『さんげろく』で ‘o’ 表記があらわれる環境を整理し、撥音 ‘n’ に続く場合のみにあらわれることを指摘し、そのうえで次のような可能性を想定する。

（6）コリャードの認識が一般的な日本語母語話者とも共通するものであったと仮定するのであれば、母音単独音節 /o/ の音価が［wo］から［o］へと移行する現象は、とある時期に全ての母音単独音節 /o/ の音価が一挙に変化したということではなく、一部の音環境において、先んじる形で変化が生じていったものであったと考えられる。中世末期から近世初期にかけては、規則的な現象であった連声が徐々に失われる時期に当たり、連声によって本来の［vo（ママ）］として発音されることがなくなっていた撥音に後続する助詞「ヲ」が、母音単独音節 /o/ に回帰する際に、［no］からナ行子音n

のみを取り払った［o］の形になっていったという流れが想定される。

つまり、‘o’ 表記を連声と関連付けるが、連声によって生じた［no］が［o］へと変化する過程を想定している。これは、コリャードの表記を音声実態として直接的に捉えるものといえよう。

岩澤（2017）では、可能性の指摘という形で、主にこの表記があらわれる環境、‘o’ の形、そして連声表記の可能性の排除といった点から上記の解釈を選択する。このうち、同論で ‘o’ 表記の出現環境とするのは、撥音 ‘n’ に続く点、助詞「ヲ」にあらわれる点である。そしてその環境であっても ‘vo’ をとることが少なくないとする。これらは ‘o’ の表記の性格を捉えるうえで重要な指摘である。

2.3 ‘ŏ’ 表記について

なお ‘ŏ’ 表記については、大塚光信（1966：33）で簡潔に触れられる。

（7）ariyaqe（candela）は子音挿入のさまを文字に反映した例であるが、niŏta（*honestus）は逆になくてはならいものの無表記例である

ここでいう「子音挿入」は、中世後期の資料上にしばしば写されるもので、例えば森田武（1977：278）では次のようにまとめる。

（8）母音〔i〕または〔e〕のあとに母音〔a〕が続く時、「語り合ふ」が「カタリヤウ」、「出合ふ」が「デヤウ」となる類は、室町時代の初めからあらわれる。

妻（メヤハス）（『応永二十七年本論語抄』）　ヨリヤウ（寄合ふ）（『漢書列伝竺桃抄』）

yuqiyŏte（行合うて）　deyŏte（出合うて）（『イソポ物語』）

このように「合ふ」の例が多いが、それに限らないことは、天草版『金句集』に yyacu（帷幄）・ychiyacu（一悪）、『日葡辞書』に Miyacaxi（御明）があるのでも知れる。「極めて」を「キヤメテ」とした例も『史記抄』（一四七七成、一六二六刊）や『漢書帝紀抄』（一四七七－一五一五成）などに見える。

これは、前接する母音［i］から後続音への順行同化であり、「広義の連声」に含められることもある。大塚（1966）では短音の ‘ariyaqe’ を対照にあげ、長音では同様の現象を無表記の ‘ŏ’ 表記で写すと解釈しているようにみえる。

2.4 ‘o’ 表記をどのように扱うか

以上、‘o’ 表記については二つの見解をみた。‘o’ 表記は撥音の連声が生じる環境と対応することから、連声との関連が疑われる他、さらに ‘o’ の形から音声実態と

しての［o］との関係が指摘される。また、‘ŏ’ 表記については広義の連声の無表記とされるが、これについては他の解釈は確認できない。

これらの表記への解釈はコリャードの著作の独自性に関わるもので、その性格を知るうえで、重要である。しかし、この表記が何をあらわすかに解釈を加えるには、大塚論文の指摘（（３）（７））は簡略であり、検証が必要である。また、岩澤論文のうち、（６）の指摘は、『さんげろく』における使用環境を整理し、種々の点から連声である可能性を排除した上でのものだが、反論の余地がある（後述）。

いずれにしても、書かれたものである以上、まずは文献上における当該の表記の位置づけを明確にする必要がある。よって、以下ではまず三部作におけるこの表記の使用状況を確認する。その上で、先行研究を検証し、この表記への解釈を行う。

3　使用実態

3. 1　‘o’ 表記

3. 1. 1　出現環境

‘o’ 表記は、先行研究でも整理されるが、三部作全体を対象に、改めてその使用状況を確認しておく。この表記は三部作において、１例を除いて撥音 ‘n’ に後続する場合にあらわれ（このことから以下必要に応じて ‘-n o-’ 表記とする。例外となる１例については引用（24）の大塚論文を参照。本稿でも同論と同じく保留の態度をとる）、また助詞「ヲ」に限られる（本稿末に一覧を示す）。以下、用例中の下線はすべて山田による。

（９）*Stipendio se conduco, is, ganar jornal*, chino tori, u.

（賃を取り、る：『羅西日』正編 p. 128）

（10）go uono uqe tatema tçutta.

（御恩を受け奉つた：『日本文典』p. 63 ll. 24-25）

（11）nuxi va sore de fucai son o mesarete gozaru.

（主はそれで深い損を召されてござる：『さんげろく』p. 50 ll. 3- 4）

ただし、撥音 ‘n’ に後続する環境であっても、‘vo’ 表記をとることは少なくない。

（12）*Victoriam adipiscor, eris: alcançar victoria*, riun vo firaqi, u. *vel* xôri voye, uru.

（利運を開き、く。あるいは、勝利を得、うる。：『羅西日』正編 p. 141）

（13）sono acunen uo fuxegu ni iurucaxe ga atte

（その悪念を防ぐに緩かせが有って：『さんげろく』p. 16 l. 24）

以下の表 1 には ‘-n o-’ 表記と ‘-n vo-’ の使用数をまとめる[3]（『羅西日』は正編（補遺を含む）と続編に分けて示す）。

表 1

	『文典』	『さんげ』	正編	続篇
‘-n o-’	1	14	3	8
‘-n vo-’	0	18	21	46

使用数の比率は著作によって異なり、『羅西日』では正編・続編に関わらず、‘-n o-’ 表記の使用比率は低い。著作による使用比率の差が何をあらわすかは、本稿の範囲では明らかにし難い。ただし、使用環境に関する差異は見出されないことから、これは ‘-n o-’ 表記の性質に直接は関わらないと判断する。ここでは、‘-n o-’ 表記が必ずしも徹底して用いられるものではないことのみを確認しておく。

3. 1. 2　音節か語か

「三部作」において、‘n’ に連続する場合に特殊な表記をとるのは「オ」の表記のみであるが、「三部作」中で撥音 ‘n’ に連続する「オ」表記の語は、助詞「ヲ」のみである。そのため、この表記が語に対応するか音配列に対応するか、判断が難しい。しかし、ここでは（4）の『日本文典』の記述の用例が助詞「ヲ」である点に注目する。（4）の記述は『日本文典』の “De sintaxi, & casibus, quos regunt verba”（文章論および動詞の支配する格について）の項目に含まれ、（4）の周辺には助詞や格に関する記述が並ぶ。このようなテキストの構成からすれば、（4）は ‘vo’ 表記であらわされる音節の性質を述べたものではなく、助詞「ヲ」に関する記述とみるべきだろう。この記述との対応から、‘-n o-’ 表記は、助詞「ヲ」に固有のものと判断する。

3. 1. 3　連声との対応

‘-n o-’ 表記は連声との関係が指摘される。コリャードは『日本文典』編纂にあたり、ロドリゲス『日本大文典』（以下『大文典』）を典拠に用いている[4]が、『大文典』には連声に関して次のようにある。

(14) ○N字の後にYa（や）, ye（え）, y（い）, yo（よ）, yu（ゆ）の音節が続く場合には、Nha（ニャ）, nhe（ニェ）, nhi（ニ）, nho（ニョ）, nhu（ニュ）のやうに発音されなければならない。それを書くのには，語を区別する為にya（や）, ye（え）などと書くけれども。例へば，Sanya（山野）はSannha（サンニャ）と発音する。（中略）

○又，そのNにVa（は，わ），vo（お，を），von（おん，をん）が続く場合には，Na（ナ），No（ノ），Non（ノン）のやうに発音される。例へば，Xinnŏ（シンナォー），Ninguenna（ニンゲンナ），Annon（アンノン），Cannon（カンノン）はXinvŏ（新王），即ち，ataraxij vŏ（新しい王），Ninguenua（人間は），Anuon（安穏），Canuon（漢音）である。

○又，Yen（えん）が続く場合にはNen（ネン）と発音される。例へば，Innen（インネン）はInyen（因縁）である。（177丁裏　土井忠生訳p. 636）

ロドリゲスは撥音の連声を、撥音 ‘n’ に ‘y’, ‘v’ の子音が後続する場合に生じるとする。これに対して、コリャードの著作の ‘o’ 表記の出現環境は先にみた通りで、例えば撥音 ‘n’ に連声とは関係のない子音字の ‘n’ が後続する場合にはあらわれないなど、やはり連声環境とその他の環境とを明らかに区別している[(5)]。

（15）xingiŭ ni Deus ni tai xite xinjin no cocoro vo moio voxi

（心中にデウスに対して信心の心を催し：『さんげろく』p. 4 l. 26）

もっとも、‘o’ 表記の出現環境が（14）で示される連声の記述と完全に対応するわけではない。例えば、『大文典』で ‘Ninguenua’（人間は）のような例があがるが、比較的 ‘−n o−’ の多い『さんげろく』でも、撥音 ‘n’ に係助詞「ハ」‘va’ が後続する11[(6)]例は、いずれも ‘−n va−’ の形をとる。

（16）maichinin va fajime cara iiagatta redomo

（ま一人は初めからいやがったれども：『さんげろく』p. 44 l. 9）

（17）suna vachi sono qicoie guaibun va tanin to sucoxi sonjerare maraxita.

（即ちその聞え・外聞は他人と少し損ぜられまらした：『さんげろく』p. 50 ll. 13−14）

当該時期における連声の生産性の有無なども問題であるが、‘o’ 表記は、少なくとも『大文典』の記述と一致するものではない。また、コリャードが助詞「ヲ」のみに認めているらしいことを、言語実態の反映とするのも不自然であろう。

‘o’ 表記が、連声と何かしらの関連をもつことは窺えようが、連声現象の実態そのものを写した表記とみなすことはできない。

3. 2　‘ŏ’ 表記

3. 2. 1　出現環境

「オ」の開長音をあらわす ‘vŏ’ の表記が予想される所に、やはり子音字を用いない ‘ŏ’ の表記があらわれる（本稿末に一覧を示す）。

（18）*Condio, is: adereçar manjares:* niŏta xocu vo xitate. tçuru.

（似合うた職をしたて。つる。：『羅西日』続編 p. 192）

(19) Mata aru fito vatacuxi ga coto varŭ sata xerareta to qiqi ieta ni jotte iuqi ŏte mo rei vo xi,futatçuqi no aida ni ichigô mo mŏxi ire maraxenande gozaru uie va

（またある人私がこと悪う沙汰せられたと聞き得たによって、行き合うても礼をし[(7)]、二月の間に一語も申し入れまらせなんでござる上は：『さんげろく』p. 34 ll. 15-17）

このような例は『羅西日』に 3 例（いずれも続編）、『さんげろく』に 6 例確認しており、いずれも母音字 '-i' が前接している（ '-i ŏ-' 表記）。なお『日本文典』にはこの環境そのものが確認されない。

また、『羅西日』には 'v' を用いた '-i vŏ-' も確認できる。

(20) niuŏtato vomoi, ô.（『羅西日』続編 p. 210 l. 5：似合うたと思い、う。）

'-i ŏ-' 表記と '-i vŏ-' 表記の使用数を次の表 2 にまとめる。

表 2

	『文典』	『さんげ』	正編	続篇
'-i ŏ-'	0	6	0	3
'-i vŏ-'	0	0	2	7

表 2 における使用数は表 1 と比べて少ない。しかし、同様に '-i ŏ-' が著作内で徹底して用いられる表記法ではないことは指摘できよう。

3. 2. 2　音節か語か

『さんげろく』の '-i ŏ-' 表記はいずれも「合う」の形にあらわれる。また『羅西日』では「似合う」にあらわれる。これらに対するコリャードの語構成意識は定かではないが、'o' と同様に語に固定された表記であることが疑われる。この点について、『羅西日』で '-i ŏ-' 表記が「似合う」のみにあらわれるのに対して、'-i vŏ-' 表記は次のような語にもあらわれ、対立的である（続編の用例には * を付す）。

(21) tei vŏ（帝王）p. 112 'Tres Reges'、ivŏ（硫黄）p. 129 'Sulfur'、*mexixivŏ（雌獅子王）p. 269 'Leaena'、*ivŏyama（硫黄山）p. 337 'Sulphuraria'

この点から、それぞれ使用数が少ない点に問題は残る[(8)]が、'-i ŏ-' 表記についても特定の語に固有の表記と判断する。

3. 2. 3　同化現象との対応

'ŏ' は先行研究で［i］からの同化現象と関連付けられていた。この現象は引用（8）で「母音〔a〕が続く場合」とあるように、長音のみに生じるものではない。長音以

外では、大塚論文で ‘ariyaqe’ が引用され、‘y’ を用いた表記が示されるが、子音字を用いない ‘ŏ’ との差が問題となる。

これについて、『羅西日』で ‘ŏ’ が用いられる 3 例は、いずれも「似合うて」に対応していたが、この「似合うて」には次のように ‘y’ を用いた表記が 2 例ある。

(22) *Habilis, e. apto, acomodado.* sŏtŏna. niyŏta. qiyôna.

（相当な。似合うた。器用な。:『羅西日』続編 p. 240）

このように、明らかに［i］への同化現象をあらわす ‘yŏ’ 表記が確認されることから、この現象との対応を確認するには ‘y’ 表記と ‘ŏ’ 表記との関係が問題となる。この点は解釈と関わるため、後に検討する。

参照 ‘-t’ に続く ‘a’

なお、このほかに同種とみなしうるものに次の例がある。

(23) *Hodie: oi: lo que es oi:* connita.　（今日は：『羅西日』本編 p. 57）

「今日は」に対する箇所に ‘connita’ とある。現段階では、この 1 例のみを確認している。これは、連声形「コンニッタ」に対する ‘connitta’ の誤記である可能性も残る。一方で、大塚光信（1966：34）ではこの例について次の通りに述べる。

(24) 文典の初稿本に近いと思われるスペイン語稿本（大英博物館本）には、前掲文（山田注：引用（4））につづいて「t で終る語の後に ua が続くと u がなくなる[(9)]」とある（p. 144）が、connita（hodie）がその例であろう。ua ではないが、（山田注：羅西日続編の）cocoro no taixet o farai sute, uru.（*abijcio）も同様な例と思えるが、誤植の問題もあり、簡単には断じがたい。

これに従うなら、‘t’ に続く ‘va’ についても同様の表記法が存在することになる。この記述を扱うには版本とスペイン語稿本の関係を明らかにする必要がある。しかし、稿本類にはこの他に数種類が確認されているもの[(10)]の、未だ充分な検討がなされているとはいえない。また、上記の引用箇所には用例として ‘taixetua’ があがるとされる（注 9 参照）が、子音字 ‘v’ が用いられている点など、報告される本文について原本を確認する必要がある。だが、筆者は現段階でいずれも確認していない。よって、この点ついては参照としてあげるに留め、以下では扱わない。

4　この表記は意図的なものか

以上確認したもので、‘o’ 表記は『日本文典』に言及があるため（引用（4））、この表記は過失によって生じたものではなく、意図的に用いられたものといえる。

また、この表記は版本に特有のものであることが、写本との比較から分かる。

コリャード「三部作」のうち『羅西日』は「本編」「補遺」「続編」からなる。このうちの、「本編」「補遺」と「続編」とは成立の過程が異なり、前二者はコリャード自筆の『西日辞書』を草稿とし、同書にラテン語を補う形で成立したものである。[11] そして、ここで問題とする ‘o’ 表記は、草稿段階にあたる『西日辞書』で用いられない。[12] 同書では撥音 ‘n’ に後続する助詞「ヲ」は、いずれも ‘vo’ 表記が用いられる（33 例）。さらに、自筆『西日辞書』と版本『羅西日』との対応箇所を比較すると、自筆本の ‘vo’ 表記が、版本で ‘o’ 表記に改められているものがある。

（25）aprender. xinan vo vqe, uru.　　（指南を受け、うる：『西日辞書』59v）

（26）Addisco, is. aprender. xinan o uqe, uru.

（指南を受け、うる：『羅西日』正編 p. 6）

つまり、‘-n o-’ 表記は「三部作」が印刷される過程で採用されたと考えられる。これは、（4）の記述に対応すること、また ‘-n o-’ といった環境に限定してあらわれることから、植字段階の過失とは考えにくい。版本に ‘-n v-’ 表記もあらわれるのは、表記法の改変が不徹底であったいうことだろう。このような例からも、‘-n o-’ 表記はコリャードが意図的に採用したものと考えるべきだろう。これは ‘o’ 表記をもとにした検討であるが、分けるべき根拠がないため、‘-i ŏ-’ も同様に捉えておく。

5　‘o’ ‘ŏ’ の書記上の位置づけ

以上、「三部作」で ‘v’ の子音字を用いない ‘o’ 及び ‘ŏ’ 表記の文献資料上における特徴をみた。これらについて、次の点を確認した。

a. ‘o’ ‘ŏ’ 表記は特定の環境下（撥音 ‘n’・母音 ‘-i’ に後接する）のみにあらわれる

b. この表記は助詞「ヲ」及び複合語後部要素「-合う」のみにあらわれる

c. ‘o’ ‘ŏ’ 表記はコリャードが意図的に採用した表記法である

a から、これらの表記は ‘vo’ ‘vŏ’ に対して有標的な表記といえる。また、この環境との対応から、先行研究にある通り、連声（以下では［i］からの同化も含む広義の連声を指す）との関連が窺える。ただし、それは実態の直接的な反映とはいえない。

b に関して、これが特定の語の書き方に関するものであるならば、コリャードはこの表記法を、語毎に用いる個別的なものとして扱っていたということになる。

また c から、‘o’ ‘ŏ’ の性質が、過失によって紛れ込んだ非正規的な表記といったものではないことが確認される。意図的な表記法ということは、この表記が人為的な規範意識を介して使用されているということであって、やはり直接的に実態を投影しているとは限らないことに注意が必要である。

6　この表記法は何をあらわすか

子音字を用いない ‘o’ ‘ō’ 表記は、コリャード「三部作」において特定の環境下において用いられる、有標的な表記であった。この表記が何かしらの意図のもと採用された表記法であれば、その意図が問題となる。それは、まずはコリャードが捉えた日本語の中にもとめるべきであろう。現段階で想定されるのは、この表記が用いられる環境から連声形ととるか、表記との対応から直接的な音声の反映ととるかということになる。

6.1　連声説は否定できるか

岩澤論文では、特に ‘o’ 表記について、連声表記であることを否定し［o］をあらわすものと解釈する。同論で特に連声表記であることを否定する根拠を、私に整理すると次の通り。

d.（助詞「ハ」などにはなく）助詞「ヲ」のみに連声を認めるのは不自然

e.『さんげろく』で ‘n’ と ‘o’ の間で分かち書きされるなど、両者の間には断続がある

f. コリャードは撥音をモーラ的に捉えており、自立的な撥音が後続の助詞「ヲ」と連続して捉えられるとは考えにくい。

g. 仮に連声形を指していたとするならば ‘no’ の表記が採用されるはずである。

これらについて、次のような反論が可能である。

d, f はいずれもコリャードの日本語認識に関わる。これらの疑問は、連声が当該時期に規則的な現象で、かつコリャードが直接表記に実態を反映させるという予測のもとで成り立つ。しかし、少なくとも当該時期における撥音・入声音の連声については、規則的な音的事象であったかは疑問であり[13]、語毎の読み癖といった、語彙的なものであった可能性が高い。また、『大文典』との関連もあるが、そのような事象に対するコリャードの態度は、現段階で不明である。つまり、当該時期の連声に対するコリャードの扱い方を、あらかじめ予測することは困難である。

e, g は、表記の捉え方が問題となる。e では分かち書きの存在を、要素の断続と結みなし、要素の連続を前提とする連声をあらわすとは考えにくいとする。しかし、‘o’ 表記について、『羅西日』では分かち書きをしない例も多く（正編：分かち書き有 1 例、無 2 例。続編：有 4、無 4）、ゆれも大きい。また、このような表記上の事象には、人為的な規範意識や言語への反省が反映されるとみるべきで、直感的な言語感覚と同然に捉えることには問題があり、否定の根拠として扱えない。

また、岩澤論文では「“guàn, o” のように撥音と助詞「ヲ」の間にカンマの打たれるものまで見られ、両者の間には明確な断続が存していたことが窺える」（p. 286）とし、次の例をあげる。

（27）Maichido va missa jifi no cazu no guàn, o naita reba,（以下略）

（ま一度はミサ・慈悲の数の願を、ないたれば：p. 26 l. 36）

このような例は『さんげろく』にもう 1 例あるが、同書でこの環境以外で助詞の前で ‘,’ を使用する例は次の 1 例のみである。

（28）ma ichido va sacasama, ni, vaga zaiacu no cazu cazu no coto vo vomoi facatte:

（ま一度はさかさま、に、我が罪悪の数々のことを思い量って：p. 24 l. 6）

だが、（28）については、巻末正誤表で ‘sacasama ni’ へと修正する旨が示されている。つまり、コリャードの表記法において、助詞の前に ‘,’ を使用するのは不自然といえ、（27）のような例は誤植と捉えるのが穏当であろう。

子音字を用いない表記が連声をさすものであったとすると、確かに g にいうような、子音字を変えた ‘no’ の表記が採用されない点が問題となる。しかし、これは、他の語との衝突を避けるための書記法とみなすことが可能である。即ち、子音字を変える方針をとり、助詞「ヲ」の ‘v’ を ‘n’ へと変えた場合、助詞「ノ」と衝突する。共に助詞である以上、この衝突はテキストの誤読を招くことが想定される。よって、連声表記として ‘o’ 表記が採用されることには、一定の必然性を認めうる。‘ŏ’ については、‘niyŏta’ のような例もあったことから、子音字を用いない表記を用いる理由はないようにみえるが、方針の統一と考えることができよう。

6. 2 ［o］説の妥当性

以上から、子音字を用いない表記が連声形をあらわすとする解釈は、否定できないことを確認した。これに対して、連声形からの回帰を契機に［u̯o］から［o］への音声変化が生じたとする岩澤論文の解釈は、現段階で他に支持材料がなく、その妥当性に疑問がある。また、同論では連声からの回帰を、［u̯o］＞［o］の音声変化と関連付けるが、この点にも疑問がある。

確かに撥音から生じる連声は、特定の音環境に生じた音的な現象と捉えるべきものである。だが、定着した連声形が原形へと回帰するといった現象は、その変化が一度連声を被った語に限られていることから、本来的な形態への回帰として捉えられる現象である。これは、形態的な語形変化に属するものであって、音声的変化とは変化の性質が異なる。仮に非連声形への回帰が純粋に音的現象であれば、通時的

な背景を無視して、すべての［no］が［o］へと変化しなくてはならない。

連声形から非連声形への回帰といった現象は、変化前の形態への同定意識によって生じる。例えば、助詞「ヲ」を想定すれば、その連声形「ノ」が回帰しうるのは、「ノ」が、連声が生じていない環境での本来形「ヲ」へと同定されるためである。本来形への同定によって生じる以上、その場合の音価は、助詞「ヲ」と同じでなければならず、「［no］からナ行子音 n のみを取り払った［o］の形になっていった」（岩澤2017：287）という変化の想定とは馴染まない。

もちろん、当該時期の「オ」の音価がすでに［o］であるか、［o］が異音として許容されるのであれば、変化後の音声が［o］となることは考えられる。しかし、いずれにしても、すでにそのような状態が生じていることが前提となる。連声からの回帰が形態レベルのものである以上、この現象を契機として、撥音に後続する場合のみに環境異音［o］が生じるといったことは考えにくい。

つまり、連声形から非連声形への回帰と［u̯o］＞［o］の変化とは、性質が異なるものといえ、両者は関連付けられない。よって、本稿ではこの解釈を採用しない。

6.3 ‘o’ ‘ŏ’ に対する解釈

本稿では ‘o’ ‘ŏ’ への解釈にあたり、先に触れた ‘yŏ’ 表記との関連を手がかりにする。この表記は、‘ŏ’ 表記と同環境にあらわれるものであった。

（20）’ *Habilis, e. apto, acomodado.* sŏtŏna. niyŏta. qiyôna.

（相当な。似合うた。器用な。：『羅西日』続編 p. 240）

‘niyŏta’（似合うた）のような ‘y’ を用いた表記はイエズス会版にもみられ、直前の母音［i］からの同化を反映した表記と考えられる（引用（８）参照）。

子音字のない ‘−i ŏ−’ 表記と ‘y’ を用いる ‘−i yŏ−’ 表記は、同環境にあらわれ、‘vo’ に対する有標的表記という点で共通する。よって、両者の関係は同じ現象を捉えた異表記か、同環境に生じる別の現象をそれぞれ捉えた別表記ということになるが、前者ととるのがより自然だろう。

また、このような例から、子音字 ‘v’ の不使用が、前接の文字と同じ子音字を付加[14]することを暗にあらわすという「三部作」の方針が窺える。よって、‘o’ についても同様と判断し、本稿では ‘o’ ‘ŏ’ 表記は連声形をあらわすと解釈する。そのような解釈によれば、‘ŏ’ 表記は ‘o’ 表記との整合性を優先した表記、‘yŏ’ 表記はより音声的な表記という関係といえよう。

7　まとめ

本稿では、コリャードが「三部作」で用いる ‘o’ ‘õ’ は広義の連声を意図した表記法と判断した。この結論は ‘o’ が［o］を直接あらわすとする解釈を否定するものである（ただし、当該時期の「オ」の音価に［o］があらわれた可能性は否定しない）。

もっとも、連声表記ではあっても、他の連声が生じうる環境に類似の表記法を用いない点などから、これが実態を反映するわけではない。書記上の問題などにも配慮する必要があるが、コリャードの連声に対する理解の一端としてみるべきだろう。

また、ここで注目されるのは、イエズス会版では表記上に反映しない連声を、コリャードは反映させる方針をとっている、という点である。コリャードは「三部作」において、‘’ や ‘~’ といったアセント符号によって、イエズス会が印刷物上に反映させなかった日本語の要素を写そうとする（これらについても、当然日本語の実態の直接的な反映とすることはできない）。このような書記法はコリャードの著作における特徴といえるものである。何故、そのような方針をとるかは問題であり、その背景を議論する上で、アセント符号の他に、それとは異なる方法を用いる ‘o’ ‘õ’ の表記があるという点は重要であろう。この点については、改めて検討したい。

注

（1）　以下の考察において、表記について次の方針をとる。

・子音字の ‘v’, ‘u’ に言及する際は ‘v’ を代表させる。ただし引用時は本文ママとする。

・「三部作」からの引用において、同著作で用いられるアセント符号について、語の弁別に直接関わらないもの（「アクセント」をあらわすとされる ‘’ 及び濁音前鼻音をあらわす ‘~’）は必要のない限り省略する。

・異体字 ‘s’ と ‘ſ’ については ‘s’ に統一する。

（2）　この前文脈は、連声表記の過剰な適用による表記誤記について述べたもので、次の通り。

連声現家（ママ）は表記されないことが普通なので jenanxi（sancti）nanho（senestet iuuenes）もその連想からくる誤記であろう。canhiô（necessarius）も一面同様な例であるとともに nhô>nhiô の表記が注目されるが、他に参考例がない。

（3）『さんげろく』における用例数について、岩澤（2017：284）では 15 例を示す。本稿では、このうちの次の例をやや不審と判断し、用例に含めていない。

fon no Deus ni caqete igue no xeimono o tate ta redomo,

（本のデウスに掛けて以下の誓文を立てたれども p. 56 l. 33 – p. 58 l. 1）

（4）　土井忠生（1938）参照

（5）　ただし、『羅西日』に大塚（1966：33、注（2）参照）で示す jenanxi（善男子）nanho（男女）がある。これは大塚氏の言うとおり、連声に関する表記規則の過剰な適用とみるべきだろう。

（６） 内１例は原語confesionに接続

（７） この箇所は大塚光信氏による翻刻で、後半の「申し入れまらせなんで」の否定が「礼をし」にもかかり「礼をせず」の意となる旨が注される。

（８） この他の『羅西日』にみられる ‘–i vŏ–’ の例はいずれも「合う」を含む（全て続編）。nivŏta’（似合うた）p. 193 ‘congruus’, p. 210 ‘digno’、nomivŏta（飲み合うた）p. 186 ‘collacteus’、qi ni vŏta（気に合うた）p. 167 ‘accersio’, p182 ‘carus’

（９） なお大塚高信訳（1957：98、引用（４）への注）では、同様の箇所について、次のように報告しており、このあとに用例や促音との関係の記述が続くことがわかる。

S本（山田注：スペイン語稿本）にはなお次の記述がある。「tで終る語の後にua（は）が来るとそれはuを失う。例．taixetua（大切は）。tがqの前に来るとcに変わる。例．xutqe（出家）。又xの前に来るとxに変わる。例．xuxxŏ（出生）。その他の変化は辞典参照。」

（10） 早くにはE. Satow（1890）でボルジャーノ資料館に別のスペイン語稿本とイタリア語訳稿本の存在が報告される。これらはヴァチカン図書館へ移譲された後、行方不明とされたが、Sven Osterkamp（2014）で「再発見」とその報告がなされている（小鹿原（2015:210–211）参照）。

Osterkamp（2014）では、大英博物館蔵本（BL）とヴァチカン図書館蔵本（BAV）とを対照すると、両者の内容はほぼ同一である一方で、BLには多くの脱落があるとされ、BALのほうがより原本的といえることなどが報告される。

（11） 大塚光信（1967）など参照

（12） なお ‘ŏ’ 表記も確認できないが、‘–i’ に ‘vŏ’ が後続する環境そのものが確認できない。

（13） 松本宙（1970）など参照

（14） 「三部作」ではヤ行子音を ‘i’ であらわすことが主で、‘y’ はむしろ例外的である。

参考・引用文献

岩澤克（2013）「コリャード『懺悔録』の表記の特質－イエズス会資料との差異」『上智大学国文学論集』46

――――（2017）「ドミニコ会文献のアクセント注記と母音単独音節 “o” の存在について」『日本近代語研究』６

大塚光信（1966）「解題」『コリャード　羅西日辞典』臨川書店

――――（1967）「コリャードの日本語辞書について―自筆稿本を中心として―」『本邦辞書史論叢』三省堂

――――（1986）「解説」『コリャード　懺悔録』岩波文庫

小鹿原敏夫（2015）『ロドリゲス日本大文典の研究』和泉書院

土井忠生（1938）「コリヤド日本文典の成立」『日本諸学振興委員会研究報告』第三篇

松本宙（1970）「連声現象の体系性をめぐる疑問」『国語学研究』10

森田武（1970）「音韻の変遷（３）」『岩波講座　日本語５』岩波書店

E. Satow（1890）‘The origin of Spanish and Portugese Rivalry in Japan’ *Transacitions of the Asiatic Sociely of Japan* Vol. XⅧ, Tokyo：Hakubunsha（*Collected works of Ernest Mason Satow* ; pt. 2　Ganesha, 2001による）

Sven Osterkamp（2014）‘Notes on the Manuscript Precursors of Collado’ s *Ars grammaticæ Iaponicæ lingvæ* in the British Library（Sloane Ms. 3459）and Especially Biblioteca Apostolica Vaticana（Borg. lat. 771）’ *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforchung* 36

参考・引用資料

さんげろく：大塚光信翻刻『コリャード　さんげろく私注』（臨川書店　1985）／日本文典：大塚高信訳『コリャード　日本文典』（風間書房　1957）／羅西日辞書：『コリャード　羅西日辞典』（臨川書店　1966）／日本大文典：『日本文典』（勉誠社　1976）、土井忠生訳『ロドリゲス　日本文典』（三省堂　1955）

「三部作」における ‘o’ 表記・‘ŏ’ 表記一覧

※『羅西日』は日本語項目部分を示し、頁数と見出しのラテン語を示す。その他は、表記が確認される箇所のみを示し、頁数と行数を示す。

‘o’ 表記

『さんげろく』：14 例

go iqen, o（御異見、を）p. 18 l. 30、go von o（御恩を）p. 22 l. 29、xei mon o（誓文を）p. 24 l. 21、icono（遺恨を）p. 26 l. 4、guan o（願を）p. 26 l. 33, 、guan, o（願、を）p. 26 l. 36、xeccan o（折檻を）p. 30 l. 6、rocunin o（六人を）p. 34 l. 29、mŏnen o（妄念を）p. 38 l. 15、guaibun o（外聞を）p. 40 l. 1、son o（損を）p. 50 l. 4、iqen ocuvaie（異見を［加え］）p. 56 l. 26、xeimon o（誓文を）p. 58 l. 5、fan o（判を）p. 58 l. 9

『日本文典』：1 例

go uono（御恩を）p. 98 l. 9

『羅西日』正編：3 例

xinan o uqe, uru.（指南をうけ、くる）p. 6 ‘addisco’、mufono cuvatate, uru.（謀反を企て、つる）p. 106 ‘proditio’、chino tori, u.（賃を取り、る）p. 128 ‘stipendio se conduco’

『羅西日』続編：8 例

zanguen o ij tçuqe, uru.（讒言を言いつけ、くる）p. 181 ‘calumnior’、dai von o ague : uru.（大恩をあげ、ぐる）p. 223 ‘exclamo’、von o fodocoxi, u.（恩を施し、す）p. 239 ‘gratificor’、vono vasurezu, nu.（恩を忘れず、ぬ）p. 239 ‘gratus’、xeccano cuvayerarezu, nu.（折檻を加えられず、ぬ）p. 249 ‘impunitus’、sono zonbun o touanu fito.（その存分を問わぬ人）p. 252 ‘inconsultus’、sorajei［改行］mono tate. tçuru.（空誓文を立て、つる）p. 301 ‘periuro’、guano, tate : tçuru.（願を立て、つる）p. 311 ‘profiteor’

‘ŏ’ 表記

『さんげろく』：6 例

tçuqi ŏte（つき合うて）p. 20 l. 39, p. 26 l. 2, p. 38 l. 20、iori óte（寄り合うて）p. 30 l. 30、iuqi ŏte（行き合うて）p. 34 l. 16、tçuqi ŏta（つき合うた）p. 46 l. 18

『羅西日』：3 例（いずれも続編）

niŏta xocu vo xitate.（似合うた職をしたて）p. 192 ‘condio’、niŏta.（似合うた）p. 242 ‘honestus’, p. 244 ‘idoneus’

附記

本稿は、第353回日本近代語研究会春季大会（於 明治大学）での口頭発表にもとづくものである。発表時の質疑や、その後の意見交換によって、有益なご意見を多く賜った。この場に記して感謝申し上げる。

（やまだ・しょうへい　京都精華大学非常勤講師）